

とうきょう すくわくプログラム実践報告書

所在	西東京市中町 4 - 4 - 16
園名	西東京市立なかまち保育園

1. 活動のテーマ

<テーマ>

身体の不思議 身体が動くのは何故？元気に過ごすとは

<テーマの設定理由>

友だちと一緒に身体を動かして遊ぶこと、美味しく食べること、食べた物はどこに行くのかの問いかけ等を通して自身の身体の不思議に気付き人体の構造へと興味関心を広げ調べたり観察したりすることを通して感覚的に命・健康を大切にすることを育む。

2. 活動スケジュール

- ・クラスを 2 グループに分けて活動することを決める。
- ・メインをトランポリンにして、他にはどのようなものにするか考え、一本橋、ソフトブロックジムも用意することを決める。
- ・トランポリンは初めて体験することになるため、当日まで子ども達には知らせず、楽しみや驚きも体験できるようにする。

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

・ホールの中央にトランポリンを置き、周りに巧技台の一本橋、ソフトブロックジム等を設置する。トランポリンには 3 名までという約束以外は、子どもたちの発想で活動していく。

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

トランポリン、平均台（一本橋）、ソフトブロックジムを使って身体を自由に動かして遊ぶ。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

・少人数ずつホールに行き、好きなように全身を使って身体を動かす。危険のないように最低限の注意事項のみ伝える。ホールに入ると「わぁ～・楽しみ・早くやってみたい」と期待の声が上がる。

【トランポリン】

・トランポリンを見ただけでその場でジャンプをしたり、片足跳びをしたりする姿も見られた。トランポリンに触り、「硬い・ベッドみたい・ジャンプしたい」と言ったり、横になったりする。ジャンプをすると、「（床より）トランポリンの方が跳ねるから面白い・音が聞こえた・目が回る・気持ち良い・楽しい・僕もやりたい・結構足が疲れる」「ひざを曲げた時と曲げない時の着地の音が違う・ひざを曲げない方が跳びやすい・（ずっと跳んでいると）手が疲れる・宇宙に（天井まで）跳んで戻る、の繰り返しだね」等と話す。跳ぶことに慣れてくると、座って跳ぶ、3人で手を繋いで跳ぶ・かえる跳び・両手を上げて跳ぶ・足でグーチョキパーをしながら跳ぶ等、自分たちのやりたいように跳び始める。「走っている時ここ（胸）が痛くなるけど、トランポリンも痛くなる」と身体の発見もあった。

【平均台（一本橋）】

・飛び石のように跳ぶ・またぐ・両足を閉じて跳びながら渡る・片足跳びをする等の姿が見られる。
・しばらくすると、「つなげ方（置き方）変えてもいい？」と聞く子がいる。置き方を考えて、“作る→渡る”を繰り返し熱中して遊んでいた。その様子を見て、周りに数名集まってくる。置き方をみんなで考えて、話し合いながら遊ぶようになる。保育者は「重ねるのは2段まで」という最低限の約束事のみ伝え、危険のないように見守っていた。

【ソフトブロックジム】

・トランポリンや平均台でたくさん身体を動かしたあとに、ソフトブロックジムの上で寝そべり休憩しにくる子が多かった。他には、平均台からサーキットのように走ってきて、トンネルのようにくぐったり、滑り台のように滑ったり、上に登って飛び降りたりしていた。また、数名で上に座り、家に見立ててままごと遊びが始まる。終わりになるまで、ままごとが盛り上がっていた。



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

・トランポリンを跳んでみると、床でジャンプする時とは違うぎこちなさがあった。上に上に跳ぶのではなく、下に下に跳ぶような姿がある。長い間跳んでいると、短時間でもコツをつかんで跳び方が上手になってくる。保育者が跳び方を教えるのではなく、友だちと一緒に遊ぶなかで、友だちの跳び方をまねしてやってみることで、すぐにできるようになったので、見て学ぶ大切さに気づくことができた。また、トランポリンは跳んでいるだけでかなりのエネルギーを消費するが、休憩タイムまでほとんどの子が止まることなく走り続けていた。身体を動かすことの楽しさを遊びの中で伝える事ができてよかった。

・ホール全体をサーキットのようにして、最低限の声掛けのみで取り組んだが、危険な遊び方をする子は見られず、疑問があったら保育者に確認してからやったり、子どもたち同士で注意、確認し合う姿も見られた。いつもと違う遊びの場でも、日々の保育の積み重ねがあることで、子どもたちが安心安全に過ごせる環境になっていることに改めて気づくことができた。